令和６年度　Ｎｏ．３

銀杏坂

～輝く薩摩中央～

令和６年４月24日（水）　南日本新聞

本校の活性化について，南日本新聞に掲載されたので紹介します。

さつま町が通学、資格取得費助成

薩摩中央高 活性化着々

わが町フラッシュ

さつま町内唯一の高校の薩摩中央高校（同町虎居）は本年度、創立20周年を迎えた。少子化で定数割れは続くが、地域に根ざした学校づくりを掲げ、行政も存続に向けて支援に力を入れる。新入生は女子バレー部への入部希望や中学生向けの体験授業実施の成果もあり、前年度比約1・5倍に増加。地元も活性化につながると期待を寄せる。

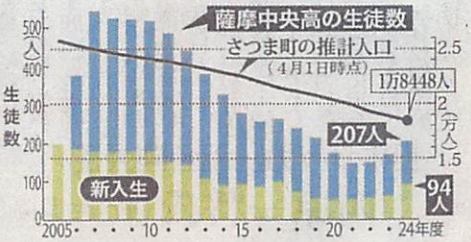
薩摩中央高校の第20期生となる新入生　＝さつま町虎居

「将来の夢は教師。勉強と合わせて部活動も頑張りたい」。9日にあった入学式で、新入生代表宣誓を務めた中島恵さんは新生活に胸を膨らませた。1年生94人が入学した。

同校生徒数は少子化の影響で減少傾向だったが、24年度は新入生が前年度に比べ30人増加。5年ぶりに3学年で200人を超えた。

Q ズーム　薩摩中央高校

旧宮之城高と旧宮之城農業高が統合して2005年度に開校した。普通科・生物生産科・農業工学科・福祉科の4学科からなり、生徒数は24年度207人。3学年がそろった07年度545人をピークに減少し、21年度は150人まで落ち込んだ。専門学科は町内の農畜産業や福祉事業所との連携を深めており、普通科も生徒が地域の課題解決に取り組む授業「ちくりん学」などに力を入れる。



新入生の増加は、23年度に活動を再開した女子バレーボール部の存在が大きい。地元の小中学生とも交流を深めている。また、町内唯一の中学校・宮之城中3年生を受け入れる体験授業の効果もあったとみられる。同中出身者の比率は45％（前年度比14ポイント増）に上った。

体験授業の実施で成果　新入生、前年度比1.5倍

■生徒確保へ連携

一方、町の人口は減少が続く。05年の誕生時に比べ約7千人減り、1万9千人を割り込んだ。町は活性化の柱となる同校を支えることで、課題解決の道を探る。

これまで生徒の寮費や通学費、資格取得費用を助成し、就職希望者向けの町内企業見学会に協力。支援事業は、23年度予算ベースで約2千万円を計上した。

24年度は入寮希望者が収容人数を超えたため、県教委に教職員住宅の空き部屋活用も要望した。県教委は町内に下宿先がなく、教職員の入居見込みもない状況を確認。住宅が寮に隣接して生徒管理もしやすいと判断し、地元の声を踏まえて1年の特別利用を認めた。

町担当者は「生徒が確保できれば、卒業生の町内就職などにつながり、町の振興になる」と話す。

パートナーシップ協定を結ぶさつま町と薩摩中央高校　＝同町役場

■地域に根ざす

20周年を迎えた薩摩中央高は10日、町との連携強化を目指し、パートナーシップ協定を結んだ。産業振興、文化・スポーツの発展、福祉や国際交流などの分野で協力を密にする。

町側は新たな支援策として、24年度から部活動で九州大会以上の試合に出る際の旅費などを助成。路線バス減便に伴う通学対策にも取り組む。

高校側も同年度、学校運営について保護者や住民に意見を求め参画してもらう「コミュニティ・スクール」を導入する。中須康文校長（55）は「地域の期待を強く感じる。町の発展に貢献する人材を多く育てていきたい」と意気込む。

（山田天真）